

中国艶本の名ガイド

土屋英明著
中国艶書大全四六判 228頁
研文出版
[本体 2,400円 + 税]

大木 康

土屋英明さんの『中国艶書大全』が刊行された(二〇一八年九月 研文出版)。これは、氏が長年本誌に連載を続けておられる「中国の性愛文献」の中から五〇点ほどを選んで整理を加え、時代順に編集したものである。この拙文が掲載されるであろう本誌四五九号では、「中国の性愛文献」も第二六四回目になるという。第一回が一九九七年の五月号だから、もう二〇年以上も連載を続けておられることになる。これだけでも、その精力に感服である。ところが土屋さんは、この連載ばかりでなく、『道教の房中術 古代中国人の性愛秘法』(文春新書 二〇〇三)、『中国の性愛術』(新潮選書 二〇〇八)、『中国の閨房術 性愛秘史と房中術秘伝』(学習研究社 二〇〇九)などの著書のほか、『金瓶梅』(上・下)、『秘本「一片の情」艶情夜話』(明代小説「一片情」の翻訳)、『房中秘記 中国古典

性奇談』、『房中悦あり 中国性奇談』、『中国性史 陽根譚』(ともに徳間文庫)などの翻訳がある。ここには一部を挙げただけで、ほかにも多数。すごいパワーである。

この土屋さん(実はペンネームなのだ)には、何度かお目にかかったことがある。もともとテレビ番組の製作に携わっておられた方で、実際にお目にかかった印象も、著作の量が示すごとく、とてもエネルギーッシュで年齢を感じさせない。わたしが土屋さんにお目にかかるのは、いつも土屋さんが中国小説の翻訳にあたって、わたしの奉職する東京大学東洋文化研究所の図書室に、資料を調べにいられた際のことである(東洋文化の図書室には、その手の蔵書が多いのだ)。土屋さんは関西にお住まいであるが、こうした資料への執念も尊敬に値する。本書の「おわりに」に、「私は本が好きで衝動買いを

してしまふ、古本も同じで、艷本が好きだったから、目にしたものはかならず買っていた」とある。何かコレクションをはじめると、集めれば集めるほど、自分が持つていないものがほしくなるもので、それを探索するのは、楽しみであるとともに、なかなかエネルギーが(財力も)いる。土屋さんは、中国の艷本という世界に「はまり」、その道に邁進しておられるのである。ちなみに本誌「中国の性愛文献」の連載、第一回は『老子』であつて、そこからほぼ狂いなく時代順に現代まで至つている。当初から全体の構想を立てておられたのである。『中国艷書大全』に選ばれたのは、どちらかといえば文学的な書物が中心であるが、本誌の連載を通して拝見したところ、歴代の医書や道教的養生書が数多く取り上げられているのも、重要な特色である(こちらは先に挙げた房中術関連の著書に結びつく)。

考えてみると、これまでの中国文学研究のあり方を見てみると、だいたいは詩であるとか、小説であるとかジャンル別に専門が分かれていて、そのなかで、わたしは杜甫が専門とか、『紅樓夢』が専門といった形になっているのが普通のようである。ある一つのテーマを柱にして、時代をこえ、ジャンルをこえた研究はそう多くない。「楊貴妃」を柱に、時代とジャンルをこえて「楊貴妃文学」を追究された竹村則行

『楊貴妃文学史研究』(研文出版 二〇〇四)などを思いつくが、ほかにはあまりない。その意味でも、「性愛文献」もしくは「艷本」を軸に中国の文献を通覧した土屋さんのこの『中国艷書大全』は、なかなか画期的であり、示唆的な方法なのである。ここには、詩の集である『詩経』もあれば、小説、それも文言小説の『遊仙窟』、白話小説の『金瓶梅』、また民間歌謡の『掛枝兒』、『山歌』、また民国期の『性史』、現代の作品に至るまでが網羅されている。なるほど、中国の文学を、「艷本」「性愛文献」というテーマで切り取つて見ると、それがきわめて大きく豊富な世界を形作つていことがわかる。

近現代の、いわば科学的性愛物に目配りをされているところも一つのみそである。わたしもかつて中国留学中、しばしば列車に乗つて各地に旅行をしたのだが、当時は北京―上海間の特急列車でも一三時間くらいはかかったもので、車内ではいかにも過ごすかは大問題であつた。そんなこともあつてか、駅では各種の雑誌を大量に並べて売つていた。そのなかに『民主と法制』などと、いかにも堅そうな名前の雑誌があつて、結構それが買ひ求められ、車内で一心に読んでいた姿が見かけた。中国の人はみんな勉強家だと思つていたのだが、この雑誌の内容、ちよつとのぞいてみたところ、さまざまなお事件をめぐる裁判記録などが掲載されていて、これを探偵小

説として、また時には性愛小説として読むこともできるものであることがわかり、はあ、と思つた次第である。一見まじめな文献にも、また別の読まれ方がある。科学的『性史』などもどう読まれたか。何となく想像がつく。

実は土屋さんは二〇〇五年に、よく似た書名の『中国艶本大全』（文春新書）を出されている。こちらは『遊仙窟』『如意君伝』『痴婆子伝』『金瓶梅』『僧尼孽海』『春夢瑣言』の六点、いずれも小説を紹介したものであるから、「大全」の書名としては、今回の本の方が、その名に沿っているといえようか。

本書では、I「古代から唐・五代・宋・元の時代」（二二種）、II「明の時代」（二六種）、III「清の時代」（二四種）、IV「中華民国の時代」（六種）、V「中華人民共和国の時代」（八種）と時代順に章を立て、それぞれの作品を紹介している。各作品についての体例は、小説作品などの場合、基本的に、物語のあらすじ、原文、翻訳、そして資料の来歴、作者についての紹介といった形になっている。まずは、これを読めば、作品のだいたいの内容がわかり、作品のさわり（おおむねいわゆる濡れ場）を原文と翻訳で楽しむことができ、さらにそれぞれの資料についても詳しく知ることができる構成である。さまざまな作品のあらすじを通して見るもよし、さわりの部分だけを讀むもよし、はたまた背景や資料の来歴の部分を見るも

よし、いろいろな楽しみ方ができようであろう。

わたしたちにとつて、とりわけありがたいのは、この作品の背景や来歴の部分が充実していることである。一つだけ例を挙げるならば、『燈草和尚伝』の項で、台湾天一出版社の『明清善本小説叢刊』に写本と石印本が収められることを紹介した上で、

この石印小本の底本は、揖可磨働（池本義男氏）集輯、鬼磨子書房刊本（一九七八年）だ。抜け字を補って書き込まれた字体が池本義男氏のものだからだ。

とあり、影印本の底本の種明かしをしてくれているところもうれしい。「揖可磨働」は、中国語で読むと「いけもと」に近い。知る人ぞ知るといった類の知識を記してくれているのだ。

多少の希望もないわけではない。もちろん、二六〇点の中から選ばなければならぬわけであるから、当然取りこぼしは起こりうるのだが、『詩経』や六朝の楽府を挙げられたのであれば、まさしく艶詩ばかりを集めた超一級の「性愛文献」ともいえる『玉台新詠』はあつてはしかなかった。

また、性愛といつても、どちらかといえば今日の目から見てノーマルというか、健康的な性愛の文献が集められている

ことはたしかである。実は、中国におけるこの世界、今から見れば奇習としてしか考えられていない纏足のこと（現代の小説、馮驥才の『三寸金蓮』は取り上げておられるが）などもあり、かつての文人たちは、結構纏足に夢中になっていた。明末清初の南京秦淮の色街の記録『板橋雜記』を著した余懷には、もっぱら纏足について論じた『婦人鞋襪考』の著書があり、やはり明末清初の文人李漁の『閑情偶寄』などにも纏足議論がある。さらに同性愛の世界もまた、当時の文人たちが夢中になったテーマであり、文献としても、明末の小説『弁而釵』（連載では第八八回で取り上げておられる）あるいは清色の『品花宝鑑』（連載では第一四九回）などは、いずれも男色をテーマにした小説である。こうしたものも収録されていれば、中国における艶本の世界がもつと広がることはたしかであろう。

さらに、土屋さんは、まとまった書物としての「性愛文献」を追求しておられるが、例えば『西遊記』などのなかにも、濯垢泉で七人の女の妖怪（美女である）が湯浴みをしている時に、悟空が着物をかつさらい、猪八戒がなまずに化けて温泉に入り、女怪たちの股の間を行ったり来たりなどという部分もあり、十分に「性愛文献」としての条件を満たせるかもしれない。

もちろん、別の出版社から出たものであるし、まだ現在進行形のものではあるのだが、本誌「中国性愛文献」の総目録、もしくは索引のようなものをつけていただけたら、本書に収められなかった文献を知るためにも、よい案内になったのではないかと思う。

中国における艶本、性愛文献を概観するには何より便利な書物であり、この本が刊行されたことを喜びたい。土屋さんには、いつまでもお元気で、さらに続編を出していただけることを期待したい。

（おおき・やすし 東京大学東洋文化研究所）